

書評

John Morreall

Comic Relief: A Comprehensive Philosophy of Humor

Wiley-Blackwell, 2011 年、208 頁

板野史記*

1. はじめに

本書は、アメリカのウィリアム・アンド・メアリー大学の名誉教授である John Morreall (1947-) による、ユーモアに関する哲学的な考察を行った著作である。著者は、主に哲学や宗教学を研究しており、そこに笑いやユーモアの理論を取り入れている点が特徴的である。本書の他に、*Talking Laughter Seriously* (1987) や *Humor Works* (1997)、*Comedy, Tragedy, and Religion* (1999) などの著作があり、哲学や宗教学と笑いやユーモアの接続を試みていることが窺えるだろう。

哲学のみならず、さまざまな学問において笑いやユーモアについての考察は行われている。例えば、「なぜ笑うのか」という問いは、心理学的視点のアプローチとも言えるだろう。また、「どのように笑うのか」となると、生物学からの見解も必要である。さらに、こういった笑いそのもののメカニズムに関する問いの他に、「何を笑うのか」という文化や芸術、歴史などの分野にも繋がるような笑う対象、つまり何がユーモアとされていたかに関する問いも考えられる。このように学際的に展開される笑いやユーモアの研究について、では哲学はどのように接近することができるのだろうか。

本書においては、ユーモアの哲学というものは、ユーモアとは何か、またユーモアが人間の生活にどのように適応するのかを追求することであると示されている。つまり、笑いやユーモアそのものの探究こそが、哲学的なアプローチの一つであると言えるだろう。そのために、著者は多くの哲学者が行ってきた笑いについての哲学的探求を、「優越の理論 (Superiority Theory)」、「不一致の理論 (Incongruity Theory)」、「緩和の理論 (Relief Theory)」という主に 3 つの理論の枠組みを用いて、より子細に表すことや、笑いにおける愉快さと、悲しみや怒りのような感情との根本的な違いから、笑いやユーモ

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程；u639397g@ecs.osaka-u.ac.jp

アの独特な立ち位置を提示すること、人類学、心理学、美学などの学問から一貫した笑いの利点を見出すことなど、さまざまな思索を行っている。では、実際に笑いやユーモアとはなんだろうか。それを明らかにするために、まずは本書の内容がどのように構成されているかを確認していく。

2. 本書の構成

本書はまず、アメリカの雑誌である *The New Yorker* で漫画作家をしていた Robert Mankoff による文書と、著者本人による文書の 2 つの序論から始まり、以降の本論は全 8 章で構成されている。

1 章の「笑い事じゃない：ユーモアの伝統的な拒絶とユーモアの伝統的な理論 (No Laughing Matter: The Traditional Rejection of Humor and Traditional Theories of Humor)」では、主にユーモアの哲学の概観として、笑いの反社会性や、本稿 1 節で示した 3 つの理論の枠組みについてなどが述べられている。例えば、プラトンやトマス・ホブズの思想は、他者との比較からなる「優越の理論」、イマヌエル・カントやアルトゥル・ショーペンハウアーの思想は、知覚や思考の裏切りからなる「不一致の理論」、ハーバート・スペンサーやジークムント・フロイトの思想は、エネルギーや感情の緊張を開放することからなる「緩和の理論」に当てはまるとされている。また、この 3 つとは別に、アリストテレスやトマス・アキナスのように、ユーモアを「遊戯的な気晴らし (Playful Relaxation)」として扱う理論も存在している。

2 章「闘争か逃走-または笑い：ユーモアの心理学 (Fight or Flight - or Laughter: The Psychology of Humor)」では、笑いにおける「愉快さ (amusement)」というものが、怒りや悲しみといった他の標準的な感情とは違うものであることが主張されている。著者は、愉快さには信条や欲望が不在であることや、感情と理性の関係などからその主張を説明し、感情が我々の周囲との認知的で日常的な「関わり (engagement)」を伴い、現実的・ここ・今・私・日常的という精神の枠組みを持つのに対し、愉快さはそれらからの「遊離 (disengagement)」を伴うと結論づけている。その後、遊戯としてのユーモアには信条や欲望ではなく喜びを引き出すための考えが必要となることや、笑いの表情が遊戯の合図である可能性があることを示している。

3章「ルーシーから『アイ・ラブ・ルーシー』へ：ユーモアの進化 (From Lucy to "I Love Lucy": The Evolution of Humor)」⁽¹⁾では、人類において原初のおかしみとはなんだったのかを探究することが目的であり、著者によると、それは「認知シフト (cognitive shift)」という、知覚や思考の急速な変化を楽しむこと⁽²⁾であったとされる。認知シフトは我々に予測不能性や混乱を巻き起こすため、悲しみや怒りではなく愉快さへと繋がり、他者との間や集団の中で笑いとして現れる。

4章「モナ・リザの笑顔：ユーモアの美学 (That Mona Lisa Smile: The Aesthetics of Humor)」では、美的体験による喜びが、認知的または日常的なものとは相反しているという点から、ユーモアによる愉快さと共通している部分があることを示している。しかし、それぞれに当てはまらない部分も存在しており、その原因として、ユーモアが認知シフトにおいては多数ある様式の一つでしかないことや、一例としての悲劇と喜劇の対比などが語られている。末尾には、日常的な美的体験として会話の中でのユーモアが挙げられている。

5章「不適切な場面での笑い：ユーモアの負の倫理 (Laughing at the Wrong Time: The Negative Ethics of Humor)」および6章「大いに笑うこと：ユーモアの正の倫理 (Having a Good Laugh: The positive Ethics of Humor)」では、題の通り笑いにおける道徳や倫理が問題となる。5章では、1章で語られたユーモアの反道徳、反社会性を上げつつ、それがユーモアの全てではないことも述べられている。さらに、人種差別や性差別のような現代的な倫理に関わるジョークにおいても、それは主義主張ではなく無関心によって行われ、それにより強調された固定観念によって傷つく人々がいることが問題視されている。6章では、反対にユーモアには多くの、思考や感情、道徳などについての美德があることが語られる。それは2章で語られる典型的な感情とも関連しており、ユーモアにはそれをコントロールする効果があるとされている。そして、一つの例としてホロコーストという悲劇の際にあったユーモアのさまざまな効果が挙げられている。

7章「ホモ・サピエンスとホモ・ルーデンス：哲学と喜劇 (Homo Sapiens and Homo Ridens: Philosophy and Comedy)」では、これまで語られてきたユーモアの利点と、哲学の接続という試みが、主な例としてスタンダップ・コメディを取り上げながら行われている。また、この章で著者は多くの哲学者

による笑いやユーモア、喜劇についての探求を参照、比較し、笑いの哲学的な位置付けを成そうとしている。そして、東洋における思想と笑いを関連させる例として、禅を挙げている。

そして 8 章「グラスには半分しか入っていないし、半分も入っている：喜劇の知恵 (The Glass Is Half-Empty and Harf-Full: Comic Wisdom)」では、これまでの笑いの哲学の全貌をまとめつつ、知恵と関連づけながら複雑な人生の中での笑いのあり方について述べられている。

3. 愉快ならそれでいい？

本書で展開された笑いやユーモアの哲学について、評者の視点からではあるが、前節の内容を補いながらまとめてみたい。まず 1 章での 3 つの理論の比較について、著者はそれぞれに対して欠点を述べている。「優越の理論」については、他者への優越感の際に起こるのは決して笑いだけではないこと、「不一致の理論」については、負の感情も認知や思考のズレによっては起こりうること、「緩和の理論」については、笑いが起きるのに感情やエネルギーが充満していない場面も存在することが、それぞれの主な論点として挙げられている。この批判から考えると、それぞれの理論を完全に否定しているというわけではなく、それだけが笑いの全てではないと伝えたいことが窺える。実際に、筆者は「不一致の理論」から、ユーモアにおいて不一致を楽しむこととそれ以外の方法での不一致を 4 章において美学的視点で比較しようとしている。

また、本書において一貫している要素の一つとして、「愉快さと感情の対比」が挙げられる。2 章の題にもある「闘争・逃走」のように、これらに関わる感情は我々が持つ信条や欲望から起こるものだと考えられている。例えば、逃走はある対象が自らを襲うと信じ、それを回避したいと望むことで行われるものであり、この時に恐怖という感情が現れている。しかし、ユーモアにおける愉快さには、そういったものはない。つまり、恐怖や怒り、悲しさなどの感情は典型的な行動パターンと繋がっているのに対し、愉快さにおいては決まりきったことがないということが考えられる。だからこそ、予測不可能性を含む認知シフトが、笑いの原点として挙げられているので

はないだろうか。

しかし、認知シフトが決して笑いのみに関連するものではないことは、美学的視点からの考察から読み取ることができる。美学においては、認知シフトを楽しむことによって感情が生み出されることがある。やはりここでもその違い、ここでは喜劇と悲劇の違いを、信条や欲望の有無に求めようとする。その後も、無関心によるジョークの問題点⁽³⁾や、ユーモアの利点として挙げられる批判的視点など、「遊離」からなる「愉快さ」に関わる考えが随所に現れている。以上を踏まえると、このような推測をすることができる。すなわち、本書において笑いとは、「愉快さ」そのものではないだろうか。友達の中のジョークには優越も起こりうるだろうし、予想外のことで思わず笑ってしまうこともあるだろう。緊迫した感情もユーモアによって和らげることもできるだろう。そういった場面そのものが笑いの条件ではなく、そこでの認知や日常との「遊離」による「愉快さ」、信条や欲望のない「愉快さ」によって、我々は笑うのではないだろうか。

4. 本当に愉快なのか

些か結論を急いだ形となってしまったが、決してこれで論を終えるわけではない。評者としては、むしろ多くの問題を抱えているように思える。しかし紙幅の関係上、本書評では一つの疑問点に絞ってこの問題を考えたい。それは、本当に笑いにおける「愉快さ」は感情と分たれているのか、という点である。この疑問の検討のために、アンリ・ベルクソン（1859-1941）の『笑い』を参照しながら論じたいと思う⁽⁴⁾。

本書においても、『笑い』は度々援用されている。例えば、1章では「優越の理論」の一つとして、ベルクソンが説く社会矯正の笑いを取り上げられている。また、2章では笑いが感情と離れていることについて、「心情〔心臓〕に瞬間的に麻酔をかける」（Bergson, p.6/25 頁）という表現を引用している。さらに、5章でも愉快さと負の感情の対比について、笑いが感情と相容れないことをベルクソンの言葉を用いて説明している。

以上のことから、著者はベルクソンにとっての笑いもまた、感情と区別されたものであると考えていることが見受けられる。確かに、ベルクソンの笑

いにとって無感動や無関心は、一貫してその要素を担っており、著者がそこから「愉快さ」として本質的なものを見出そうとするのもおかしいことではないだろう。しかし、ベルクソンは『笑い』の第三章「性格のおかしさ」五節において、「おかしさをもった人物がわたしたちにとってまず物質的に共感する人物である」(Bergson, p.198/253 頁) ことを述べている⁽⁵⁾。つまり、笑いは感情と関係している。しかしそれは笑う立場からすると瞬間的なものであり、すぐさま社会矯正の働きによって切り離される。我々は愉快さの前に憐みや後ろめたさなどを感じており、対象を笑うように自己反省的に笑っているのではないだろうか。

これまでのように笑いが巻き起こることが理解できたとして、われわれは笑われる対象がどのように考えられるべきか、という点に目を向ける必要があるだろう。共感されながら笑われるとはいったいどういうことだろうか。これは評者の推論に過ぎないが、おそらく笑われる対象は共感されるのかそうではないのか、定まった状態ではないのではないだろうか。つまり、対象に共感するのか笑うのかは、実際には表裏一体であり、それぞれに先行する不安定で、どちらに捉えられるか決まっていない状態が存在しているのではないだろうか。だからこそ、笑う立場における愉快さと憐れみの間の当惑が現れるのだろう。

5. 終わりに

初めに述べたように、本書の目的の一つは笑いやユーモアそれ自体が何者なのかを明らかにすることだった。本書評は、その道筋を辿りつつ、表された「愉快さ」という要素に対して、一考の余地があるのではないかと言及するものとなった。しかし、その一点のみの言及となってしまったため、本書に残る課題は、また稿を改めて検討させていただきたい。また、決してこの一点のみが目的に沿ったものであるしているとは考えておらず、笑いとは一体なんなのかを明らかにするためには、まだまだ多くの時間と思考が必要である。

我々は一体笑いに何を求めているのだろうか。悲観的な世の中を少しでも明るくするためであろうか。もしそうだとしたら、笑いは「愉快さ」のみ

で成り立っていてほしいと願うだろう。しかし、それは負の感情をも含みうるものであった。この両義性はどのように扱うべきなのだろうか。最後に述べた評者の推論は、こうした問いに対する一つの提案とさせていただきたい。また、以上の議論は自己と他者、個人と社会の関係性に繋がるものであると考えている。これを明らかにするためには、笑いと哲学に関する多くの研究をより精査する必要があるため、次の機会に論じることにはしたい。

注

- (1) ルーシーは1974年に発見された世界最古の人体の化石、また『アイ・ラブ・ルーシー』は1950年代に放送されていたアメリカのコメディドラマと思われる。
- (2) ここでの「楽しむこと」は *enjoying* であり、「愉快さ」の *amusement* とは区別が必要である。*amusement* のみ、笑いによるものと考えられる。
- (3) 評者は、ここでの問題点はジョークによって強調されてしまう固定観念の存在そのものにあり、稿を改めて検討したいと考えている。
- (4) 以降、『笑い』から引用をする際は頁数を (Bergson, 原著頁数/訳書頁数) と表記する。
- (5) ベルクソンは、おかしさと夢の関連性からこのように述べたと考えられる。R, pp.191-197/244-252 頁参照。

参考文献

Bergson, Henri. 1900. *Le rire*. Paris ; Félix Alcan.

ベルクソン、アンリ 2016『笑い』増田靖彦編訳、光文社。